地質ニュース540号，6頁，1999年8月
Chishitsu News no.540, p.6 , August, 1999

—巻頭エッセイ—

白嶺ドクター

西　村　　昭[1)]

6月25日，地質調査船白嶺丸が千葉の船橋港から地質調査所の最後の調査航海に出発しました．地質調査所の海洋地質調査を長年にわたって支えてきた金属鉱業事業団所有の白嶺丸が，今年度いっぱいでその任務を終えることになったからです．白嶺丸の出航2-3週間前に，地質調査所内のある研究者から，メールがきました．「白嶺丸が無くなると聞きました．私も白嶺ドクターとして，寂しく感じます．見送りに行きます．」とありました．「白嶺ドクター」という言葉は自分では使ったことはありませんでしたが，意味はすぐにわかりました．白嶺丸で仕事をして，それで博士号を取得した人です．

地質調査所で海洋地質関係の仕事をしている(いた)人は，ほかの調査船での調査や研究もしていますが，白嶺丸での調査が仕事の中心になっている人が数多くいました．20年程前，私が地質調査所に入ったころには，年間160日の白嶺丸調査航海で日本周辺の海底地質図作りの調査とマンガン団塊の調査をしていました．それを30人足らずの海洋地質部員を中心とした研究者で行っていたので，調査，研究，そして生活までもが白嶺丸を軸に動いているようなものでした．結婚式の日取りを急遽，航海日程に合わせたという伝説的なエピソードを残した人もいます．その白嶺丸の調査で，データや試料を得て研究し，また，アイデアや研究の方向性を見いだして，これまでの間に「白嶺ドクター」の多数誕生ということになりました．私自身も白嶺丸による中部太平洋のマンガン団塊海域の調査のうち，堆積物に関する研究結果をまとめて博士号を得た「白嶺ドクター」の一人です．日本周辺の海域を始めとして，南極海域，南太平洋，中部太平洋とさまざまな海を白嶺丸で調査させてもらい，20年余の間，白嶺丸に育てられ，研究してきたといえるのです．白嶺丸に育てられ研究してきたと書きましたが，実は，白嶺丸を支えてきた多くの人に励まされ，育てていただいたのです．白嶺丸の安全な運行や調査をともにしていただいた歴代の船長をはじめとする船の方々，また，予算の獲得や運用をはじめとする様々な形で努力いただいた方々，ともに調査をした研究者や研究補助のアルバイトの学生さん，本当に多くの人々のおかげです．

6月25日の船出の朝，船橋港へ行きましたが，東京での会議のために，船が岸壁を離れるまで見送ることが出来ませんでした．東京へ向かう京葉線の電車の中から，港に出航を待つ白嶺丸の姿を見て，なんとも言えぬ寂しい気持ちになりました．

白嶺丸が就航して25年，「白嶺ドクター」が自然な響で感じられるように，船とそれを取り巻く人々と研究とが強く結びついており，そして，船での調査や生活をとおして，人として，また研究者として育てられてきた事を感じます．海洋地質の研究には船は不可欠です．海洋地質の研究はこれからまだまだ発展して行くものと思います．白嶺丸の様な恵まれた調査船で仕事ができ，「白嶺ドクター」になれたことを自分自身の記録と記憶の中にとどめておく事で，感謝の気持ちにしたいと思います．四半世紀にわたり，白嶺丸が，海洋地質の調査研究に多大な貢献をしたことを今後も多くの人に伝えていきたいと思います．きたる8月3日，調査航海を終え，白嶺丸は船橋港に帰港します．

(記1999.7.9.)

追記；「白嶺ドクター」を白嶺丸の取得した地球物理・音波探査データ，海底試料などの生データをドクター論文の基礎データとして8～9割以上使用した人とすると，私が勝手に数えて，地質調査所の職員である(った)人の中でも17人になりました．職員以外にも「白嶺ドクター」を何人かは思いうかべられますし，卒業研究に関連して試料を使用した白嶺学士や白嶺マスターは，かなりの数になります．また，これからも白嶺丸の資試料で新たに「白嶺ドクター」になる方もいると思われます．

1)　地質調査所　海洋地質部長

キーワード：白嶺丸，海洋地質調査